

「カクシゴト」

—初稿—

2022/12/15

雨森 れに

〈人物表〉

岩上 武

(40)

サラリーマン・中小企業・営業

藤川 千賀子

(45)

編集者

〈ログライン〉

千賀子がプロポーズを断った原因が家事ができない事と知り、武がそれを受け入れプロポーズを成功させる。

1 千賀子自宅・マンション廊下（夜）

エレベーターが到着し、中からと藤川千賀子（45）、次いで岩上武（40）が降りてくる。

千賀子歩き始めながら

千賀子 「ほんとに来るの」

武 「何が嫌なんだよ。恋人の家に行きたいってだけ

けじゃん」

千賀子、振り返る。

千賀子 「じゃあ、片付ける時間ちょうだい」

武、頷く。

2 千賀子自宅・室内（夜）

千賀子、玄関を開ける。

千賀子 「お待たせ。入っていいよ」

武 「冷えた」

千賀子 「文句言わないの」

× × ×

2LDKの部屋。生活感のないリビングの中央にテーブルと

ソファア。ソファアの後ろには引き戸の部屋が見

える。

武、ソファアに腰かける。

武 「綺麗にしてるじゃん」

千賀子、カップに入ったコーヒーを差し出す。

武 「サンキュ」

千賀子 「家には来てほしくなかった」

千賀子、立ったまま武を見下ろしている。

武 「恋人同士がクリスマスにご飯だけで帰るほうが

考えられないね」

千賀子 「ホテルでもいいじゃん」

武 「どこも満室だっただろ」

千賀子 「そもそも、クリスマスだからとかいらないし。仕事も無理矢理終わらせなきゃだった」

武 「俺は、今日、お前に大事な話あるんだよ。ほら、

横座って」

千賀子、座る。

千賀子 「なに。別れ話？」

武 「ばか。これからも一緒にいようって話」

武、指輪ケースを開けて差し出す。

武 「あんまり遅いのもぎ。長い付き合いだし。いい
だろ？」

千賀子 「そういう空気読まなくて強引なところ、嫌いな
んだよね」

武 「じゃあダメなの？」

武、笑いながら首をすくめる。

千賀子は引き戸をちらりと見る。

千賀子 「うん。ダメ」

武 「は？ そんなことある？」

千賀子 「ある。私は結婚ムリ」

武 「俺達何年付き合ってると思ってるわけ？ そ
りやないだろ」

千賀子 「そういうこともあるの」

引き戸の奥から、物が落ちる音。

2人、目を合わせる。

物音が続く。

武 「そういうことか。だから今まで家に入れてくれ
なかつたんだな」

武、立ち上がり部屋に向かう。

千賀子、座ったまま武の服を掴み制しようとする。

千賀子 「お願い、やめて」

武 「うるさい」

武、引き戸を勢いよく開ける。

開けた瞬間に雑多なものが雪崩れてくる。衣服、食
品、雑貨などごちゃまぜ。

武、驚いた表情で千賀子と部屋を見比べる。

千賀子、顔を両手で覆う。

千賀子 「もう無理。本当に無理。別れる」

武 「お前、職場じゃ完璧人間だって」

千賀子 「家の事はできないの」

武 「あの、だから、理由ってこれ？」

千賀子 「私、掃除も整理整頓も、できないから。仕事で帰らないことも多いし。結婚なんて自信ない」

千賀子の鼻をすする音が聞こえる。

千賀子 「この歳になって恥ずかしい。死にたい」

武 「よかったあ」

千賀子、顔をあげる。

武、満面の笑み。

千賀子 「何がいいの。人がこんなに恥ずかしい思いしてるのに」

武、ソファーに戻る。

武 「俺が主夫になるってどう？」

千賀子 「え？」

武 「俺はもともと家事好きだし、今の仕事にも未練はないよ」

千賀子 「ええ？ ……いいの？」

武 「もちろん。収入も千賀子のほうが多いし。問題ないだろ。必要なら在宅の仕事でも探す」

千賀子 「うん、うん」

武 「じゃあそれで。あとひとつ聞いていい？」

千賀子 「な、なに」

武 「なんでこの部屋は綺麗なんだ？」

千賀子 「えっと、年末、業者にここだけ掃除頼むの。昨日ちようど来てもらったばかり」

武 「あっちの部屋はいいのか？」

千賀子 「業者が来る前にゴミ以外を入れる部屋になってて」

武、吹き出す。

武 「業者来てもらうのにしまい込む奴いるかよ。

ああもう。おいで」

武は千賀子を抱きしめる。

武 「意地っ張りだし、頑固だし。仕事がとか言っとなかなか会えないし。家にも入れてくれなかった

し」

千賀子 「ごめんって」

武、千賀子の目を見て、

武 「それでも俺は千賀子がいいよ」

千賀子 「私も武がいい。おおらかなところに救われる」

武 「ここまで長かったなあ」

千賀子 「何年もうまいこと隠せちゃったから言い出せな

かったんだよね」

武 「次期編集長に浮気する暇がなくて何より」

千賀子 「何それ」

武 「こっちの話。それより」

武、指輪ケースから指輪を出す。

千賀子の左手を取りながら、

武 「はめていい？」

千賀子 「うん。家事、よろしくね」

武、千賀子、笑い合う。

指輪が薬指にすわりとはめられる。

終わり